

第5回高知県社会教育委員会会議概要

令和6年6月6日（木）10:00～12:00

高知県立塩見記念青少年プラザ 3F会議室

出席委員（岩井拓史、川上確也、久寿久美子、
齊藤雅洋、佐竹真紀、徳増千里、
眞鍋大輔、三谷七香、森岡千晴、
吉田友一）

1 開会（10:00～10:03）

（委員長）

今期の社会教育委員会では、これからの社会教育と若者世代という大きなテーマを掲げ、第3回から小テーマを設けて協議をしてきた。第3回が、子どもたちをどのような若者に育てていくか、第4回では、若者にどんな環境や活躍の場や機会があればよいか、そして、第5回では、地域の住民や、保護者がどんな役割を果たしていけばいいかということについて協議を進めていきたい。

これらの協議を踏まえて、次回からは提言案のまとめに入っていく。本日も忌憚のない意見、そして活発な質疑をよろしくお願いします。

2 議事（10:03～11:55）

【私の提言】

（委員1）

皆さんは社会の中で自分らしく生きているか。自分の本当に好きな仕事、やりたい仕事に就いているか。2番目だとしても、それに価値を見出して今を自分らしく過ごしているか。

これから高知を担う子どもたちには、人生を楽しく、自分らしく生きて、この世界に生まれてきてよかったと思ってもらいたい。好き、嫌いというのは自分の感情で決める。誰に命令されるわけでもなく、自分の生き方は自分で決めてきたと言えることが、本当に生きてきてよかった、人生が楽しいということにつながるのではないかな。今の若者世代は本当に繊細で、周りの人に気を使い、自己肯定感が低いと言われている。なぜそのようになってきたかという、今の教育は140年前からずっと変わっておらず、受け身で枠にはまっており、それを大人が疑問を持つことなく、若者世代や子どもたちに押し付けてきたからではないだろうか。社会に合わせるのではなく、枠からはみ出てもいいので自分の好きなことを否定せずに行動に移し、自分の心、感情にフォーカスする教育、それが人間の原点ともいえるところである。

これからは、感情にフォーカスする教育が大事になっていく。本当は何に興味があり、何が好きで何が嫌いなのか。自分を知り、自分を持っている人は、何があっても将来自分を大切にしたいと思えるのではないかなと思う。これを支えるのが、幼児教育や家庭教育であったり、学校教育であったりする。喧嘩をしたり仲良くしたりコミュニケーションをとるということは6歳までに確立されると言われており、幼児教育の中で自分を知り、自分を大切にしていける。

これまでの教育ではすべての日本人が平均的に学力がつくようにと、画一的な一斉授業を行ってきた。学問や芸術でさえも、教え指導するという考え方である。また、競争社会の中で、「知識を暗記し、決められた枠の中で受動的に学ぶ」という社会に出て地位を確立するための教育であった。

今は激動の時代で、10年後20年後がどんな世界になっているか分からない状況である。その中で、これからの教育では「個人を尊重し協働的に学ぶこと」が大切になる。これはこども家庭庁、文科省が進めているが、一人一人の発達段階に合わせて学ぶという部分が日本では抜け落ちている。例えば、一年生の時は一年生のことを全部しなければならない。そうではなく、幼稚園の時に伸びる子もいれば、小学校の時、高校の時、また社会に出てから伸びる子もいる。6年間又は9年間で、

自分で計画を立てて自分の発達段階に合わせて学びを深めていくことが大切になってくる。これはヨーロッパやアメリカなどでも行われていることである。

次に、教員や大人は子どもと同じ目線に立って導く存在でなければならない。私たち大人や教員は偉くない。子どもより少し知識があり少し経験があるだけで、いつも子どもと同じ目線にする。現に、子どもたちに教えられることはたくさんある。大人は成長するにつれて鎧を着るが、子どもたちは本質を知っており、そこには大切なことがたくさんある。

社会が変化し多様化する中で、「自分の興味関心に沿って自ら問いを見つけ、柔軟に解決する力を育て、生きる力を育む」という視点がある。今の教育では対話コミュニケーション能力の育成が抜け落ちているのではないだろうか。ある学校法人では、対話を中心としたイエナプラン教育を導入している。その法人が運営する2つの幼稚園は、幼児教育で初めてイエナプランスクールとして今年の2月に認定されており、その子どもたちは一つの議題で1時間話ができる。この対話をするということが大事で、お互いの違いを認め、尊敬、信頼し、その中で安心安全な場所、自分はここで何を話してもいいという環境ができていく。そこから表現力や論理的思考力、コミュニケーション能力が育まれていく。また、小中一貫の義務教育学校イエナプランスクールを2027年4月に開校予定である。人間力、生きる力を、9年間で育てていきたいと考えている。

これは幼稚園での田植え・稲刈りの様子である。イエナプランでは本物性を大事にする。親も子どもたちも一緒になって、田植えや稲刈りをしてもらおう。右上は木曜日、金曜日に行った様子である。自分で買い物交渉をしたり、野菜の育て方や料理も教えてもらったりする。

左上は生き物を飼っている水槽を眺めている様子だが、子どもたちがカエルやダンゴムシ、カニ等を飼いたいという時も、対話を大事にして、自分たちで生態やえさを調べ、物事を主体的に進めていっている。右は芋掘りの様子だが、(子どもたちが)これも給食に出してくださいと厨房の方と交渉してしまう。右下は運動会だが、マスト登りやバルーン等自分たちはどんな競技をしたいのかということ、自分たちで対話を通して考えている。

これから、子どもたちに何が大事なのかという時に「共に生きる・共に学ぶ」をテーマに、イエナプラン教育を導入した。子どもを真ん中に置いて、地域、保護者、先生、学校と共に対話を通して生きていく。地域で本当に愛された経験があると、子どもたちは絶対に外に出て帰ってくると思う。

また、先生は待ち・導く存在である。この待つということが、難しいが大切になってくる。保護者も両輪となり、理念や目標を共有して一緒になって子どもたちを育てていくということを大事にしている。企業や地域の人、保護者と共に開かれた学校ということである。

子どもを真ん中に置くということは、こども家庭庁と一緒にだが、その実践版がイエナプランスクールである。このイエナプランスクールの中で、高知の教育、また全国の教育で一番大事にした方がいいのではないかと思うのが、シチズンシップ教育である。日本では、学校の教育は知識偏重だったり詰め込み型だったりする。しかしヨーロッパ社会では、学校では何を教えるかと聞くと、立派な市民に育てるための学びの場という答えが返ってくる。幼い頃から、そのコミュニティの中でみんなが幸せになるためにはどうしたらいいのかということを考えていく。それが探究学習やフィールドワークだったり、模擬裁判や模擬選挙だったりする。それらを通して、自分はどのような人間か、みんなのためにどんなことができるのかということ、幼い頃から学んでいく。それがシチズンシップ教育である。そうすると、政治・経済・産業を幼い頃から学んでいくので、自然に社会に出て活躍できる人間が育つ。キャリア教育等は行われているが、市民として自分に何ができるかということ、教育の中に取り入れていく必要があるのではないか。

まとめになるが、私たちは今、過渡期に入ってる。教育が140年前と全く変わらない中で、私たちは今どうあるべきか。まず、大人の固定観念を外さなくてはいけないのではないか。140年間ずっと同じ教育だったため、どうしても、この教育が正しいということを子どもたちや若者世代に押

し付けていないだろうか。最初に自分らしくと話をしたが、その子らしくというところが抜け落ちてはいないだろうか。

それから親世代。親が変わると子どもは変わる。親が、「子どもは自分の自己実現のためではない」、「自分の分身ではない」と気づいた時、そこから子どもを見る目が変わってくる。学校現場は、自分の頭で考えることをしなければA Iに負けてしまう。生きる力、人間力を育てなければならない。それが大人が変わるということにつながっていく。

また、一番大事なことは、自分らしくいられるかどうかだと思う。自分の心に本当に素直に寄り添い、自分は何が得意で何が好きなのか、それをどのような形にして貢献していきたいのか、地域でどのように役立ってしていきたいのかを、幼い頃から学べる子どもに育ててほしいと思っている。これは大人にも言えることで、自分の心に素直に寄り添い、人生の最後に生きてきてよかった、本当に楽しかった、最高だったと思えるような、高知県の人が多くなることを願っている。

(委員 2)

私が公民館、社会教育というフィールドで生きてきた中で、やはりこれは大事、これから大切にしていきたいという観点で、「社会教育の実践機関として」、「チーム公民館のスタンス」、「これから大切にしたいこと」、この3点について話していく。

社会教育の実践機関として

まず、そもそも生涯学習とは何であるかということと一緒に確認したい。

この図は、以前高知県立図書館長をなさっていた丸地真人さんに地元で講演いただいた時のものをお借りした。生涯学習という大きな屋根の中に、学校教育と社会教育の二つの柱があり、縦が時間的な広がり、横が空間的な広がりを表している。家庭教育は、この中でいうと社会教育の方に入ると考える。学校教育と社会教育が二つの車輪になり、車軸が通って前に進む、これがあるべき姿である。ただ現在は、学校教育に偏りがちでなかなか前進しない。この時の講演では、これではよりよい学習環境作りはできず、国作りがおかしくなってくるのは当然、という大変厳しい指摘をいただいた。

私が勤める公民館のことを自分なりに考えてみた。やはり公民館は、「地域を作る主体を形成する拠点」だと思う。これは単に、リーダーをつくるという意味合いではなく、自分の人生をつくると言い換えてもいいのではないかなと思う。なぜかというと、公民館には戦後の荒廃した社会を立て直すために、主権国家の一員としてふさわしい人間を育てるという歴史があり、対外的にも、地域を作る主体を形成する拠点であるからである。公民館は究極のパブリック、みんなのものであり、ここでは社会教育として青少年及び成人に対する組織的な教育活動が行われる。

また、公民館には何でもできるという魅力がある。公民館で講座をひらくだけでなく、そこで人や地域に思いを馳せるような、好奇心やバランス感覚が職員には必要だと考えている。社会教育の定義・目的・事業には様々なものがあり、例えば体育レクリエーションであったり、各団体・機関等の連絡を図ることであったりとできることの可能性が大きい。都合良く解釈すれば、何でもできるということになる。

『高知県青少年団体史』には、学校・PTA・地域や国家社会が総ぐるみになって教育を見直さなければならないという意見や、学校教育のみの改革は再び見直さなくてはならない大きな壁にぶつかるだろうという意見もあり、なるほどなと思うことが多い。

チーム公民館のスタンス

我々チーム公民館のスタンスとしては、三つのことが大事だと思っている。一つ目は、「学校からの相談は何でも受けること」である。学校と連携・協働できるよう、目を配り、無理な相談・依頼でも受けるようにしている。例えば、社会科見学・職業体験学習や講師を派遣して欲しいという相談がある。学校教育を助けるのも公民館や社会教育の役割の一つだと考えている。

二つ目は、「ふるさと教育の推進」である。これは後程、写真を見せてお伝えする。

三つ目は、「躍動できる場面を作る」こと。最後に青年団の例を紹介するが、後方支援としてバックアップ、サポートしていくことも公民館、地域の大人の役割と考えている。

一つ目の事例だが、今、我々の公民館では放課後子ども教室をしている。これは今年の開校式の様子である。当時の小学校には、場所や教員の負担の問題から子ども教室を受け入れる余地がなく、それであれば公民館がやろうということで平成19年度にスタートした。支援員は現在7名おり、高校生もいれば80代もいる。色々な世代の人が、共に学び楽しく過ごすというスタンスで取り組んでいる。ありがたいことに子どもの登録数が増えており、少し前までは小学校の4、5人に1人ぐらいであったのが、今では2人に1人に増加した。公民館で行われる公的な事業ということが、保護者の安心につながっているのではないだろうか。まさに、地域協働である。

これは、先日避難訓練をした時の様子である。4月に大きい地震があり、今後必要である。幅広い世代の支援員や職員が子どもたちを迎えている。

これは、3月のお別れ会の様子である。感謝状を受けている彼は、色々な悩みがあり苦しんだ時期があった。高校生の時から支援員として教室に来てくれたが、最初は大人にも子どもにも挨拶ができなかった。だんだん心を開き、挨拶ができるようになり、子どもも懐いていった。この春に、二十歳になり就職をして旅立っていった。公民館が、若者が成長していく場所でもあることを表す、印象的なワンシーンである。

昨年、小学校長から学校運営協議会に公民館長として入っていただけないかと相談があり、入らせていただいた。今年は節目の創立150周年で、これは実行委員会の時の様子である。月に1回程度集まり、11月の式典に向け準備を進めている。これも地域と学校の協働である。

これは、文科省が作っているコミュニティ・スクール、学校運営協議会制度の仕組みである。一言で言うと、民意を注入し一体となって、学校、子どもたちを支援していこうという考えだと思う。1974年の小学校の百年誌で、50年前の実行委員の方々が2024年度の先生方に50年先を見据えたメッセージを書いている。これは素晴らしいと思い今日紹介した。

次にふるさと教育。次世代への継承ということで、近世から伝わる鯉節産業の中で生まれた伝統芸能、無形文化財の「バラ抜き節」を、公民館サークルの保存会の方々が小学校で指導している。運動会で披露したいとのことで学校から相談があり、児童も保護者も教員も地域の方々も一緒に踊る。

次は、ふるさと写真展を小学校で行った様子である。貴重な昭和初期の写真が地区公民館にあり、小学校の人権イベントで展示し、地域の方々に見ていただいた。

ふるさと教育はそもそも何なのかということと話したい。これは『新市史』の編纂室長に講師をお願いし、地元の歴史学習フィールドワークをした時の一コマである。子ども達の意識は国際化・情報化・デジタル化と外に行きがちだと思うが、やはり自分を大切に自分の人生に向き合うには、ふるさとを知って意識を内向きにする、場合によっては下を見て足腰を固めることが必要で、これがふるさと教育の原点なのではないかと考えている。

これは毎年3月に行っている公民館サークル発表会にて、劇団高知家青年団がジョン万次郎を題材にした劇を披露してくださった際の様子である。公民館としては、裏方に徹してこのように若者が躍動できる場面を作るということも大事だと思う。

私自身も青年団のOBだが、今の若者には、「わたしの時代はああやったけん」と押しつけるのではなく、「困った時にきいや」ぐらいのスタンスで接して、困った時に頼れる、あるいは風を吹かす、そういう存在でありたいと、自分自身としても公民館としても思っている。青年団も公民館を拠点に活動しており、活動の一つとして「出張サンタ」という形で子どもたちに夢を届けている。今の若者が枠組みに入らなければならないという意見もあったが、最初の取っかかりとして、その地域やOBの支援等も大事だと思う。そこからまた自分の生き方や道というのを探せるのではないだろうか。

2023 年は『らんまん』があり、今年は『デカレン』があり、歴史や文化を大切にするということで、いつになるかわからないが、市あげてジョン万次郎の大河ドラマ化を目指しているが、なかなかハードルが高く難しい。

これは、この4月にできた『新市史』の写真である。もちろんジョン万次郎のことも書かれてある。私も執筆者の端くれの端くれとして少し書いている。こういったものをベースにふるさと教育や公民館活動に活かし、今の子供や若者に伝わればと考えている。

どこに行っても出身地を言えるような人間になって欲しい。私自身、学生時代都内で過ごしてそれができなかったのも、そういう人間にはなっていないという思いでいる。

これから大切にしたいこと

これからは「学校を理解する姿勢」として、どのような子供を育成したいのかという総合理念があり、そのイメージを共有することが大切になる。あとは「教職員を助ける」こと。働き方改革とは学校だけの問題ではない。解決することが社会のため、子供のため、教員のため、地域のため、自分のためになる。

職員には、小学校への電話は時間をよく考えてかけてくださいと言うことがある。例えば12時から1時は避けましょう、水曜日は職員会があるからやめましょうなどと注意する。当然、担任は電話を取る時間もないため、そこは配慮が要るのではと考えている。他には「強みを生かした教育活動」。先ほどバラ抜き節を紹介したが、公民館サークルには色々な分野がある。社会教育機関として学校とサークルをつなぐことが一番の強みで、求められている役割なのではと考えている。少し学校教育に偏ってしまったが、これからも大切にしていきたいと考えている。

教育振興基本計画の理念には「社会や地域を開ける人材」とあるが、これには少し怖さもあると思っている。この写真は、2017年に本市の夏季大学の講師に来てくれたドリアン助川さん。ドリアンさんがパーソナリティをされているラジオ番組の人生相談では、社会の役に立たなければ生きてる意味がないという若者の声がとても多かったそうである。「役に立たなければ人生に意味がないのか、例えば2歳の子どもが亡くなったとして、その人生に意味はないのだろうか。みんながみんなそのように思うことに何か戦慄するような恐ろしさを胸の中で感じた。」とおっしゃっていたことがすごく印象的だったので今日紹介したいと思う。

まとめになったかどうか分からないが、これは過去に高知県青年大会で優勝させてもらった時の写真。今回は若者青年というテーマのため、公民館として今後も色々な取組をしていきたいと考えている。

(委員3)

私が住んでいる町は、統計上の人口が1,250人程度の小さな町である。住民票だけ置いて町にはいない人も多数いる様子で、実際に暮らしている人は1,000人を切っているのではないかと感じる。都会から移住してきた私から見て、住んでいる市や町は20年後存在しているのだろうかという純粋な疑問を抱き、同町での地域作りについて考えるようになった。

2020年の人口減少率が高知県は全国で4位、その中でも同市は3位であり、同市の中でも同町は1、2を争う人口減少率を誇っている。1か月ほど前の新聞で同市は消滅可能都市で第1位となっており、目に見えて人口減少が感じられる超高齢化地域である。この年齢のグラフを見ても、20年後を想定すると本当に市の存続、町の存続ができるのかということが現実的な問題として浮かび上がってくる。

ただし、同市も努力をしていない訳ではない。ユネスコ世界ジオパークの認定をもらっており、そこを活用したグローバル教育を前面に打ち出し、県内外から子育て世代の誘致に取り組んでいる。しかし、このグローバル教育には問題点があり、中学生から高校生は「地域のために行動貢献する」、高校生以上は「地域と世界をつなぎ未来を創造する」とあるが、何の為に、誰の為にという目的が

分からないまま進められている。その為、実践段階になった途端、生徒たちは何をすればいいのか、どう行動すればいいのかという部分で立ち止まってしまうということが起きている。他には、地域で郷土愛を育むという学びが押し付けられ、郷土愛を背負わされて、そのことを重たいと感じている生徒も多く見受けられる状況になっている。

これは、同市が抱えている多すぎる課題に起因しているのではないだろうか。「ここにいても何もできない。外に行きなさい。」という言葉が大人が子どもに言っていることをよく聞く。また、多すぎる課題を前に何を聞いてもみんな「分からない。」と言う状況になっている。ここに時間軸、場所軸、人軸、情報軸で課題の一例を挙げているが、これを見るだけでも、ここにいても何もできないという気分になるのは分からなくもない。

しかし、解釈を変え、今までデメリットだと思ってきたものを希望や強みと捉え直すと、同町は実は日本の最先端をいっており、地域作りに成功したら日本を牽引できるのではないかと考えることができる。例えば、時間の課題では人口減少と超少子高齢化、財政難。恐らく 50 年後の日本はこの地域もこの課題を抱えているが、課題を解決していくことが日本の未来を切り拓くことにつながっていくのではないかと。

場所の課題では、同市は非常にアクセスが不便であるが、外と隔絶されているからこそ、同町は町の機能、社会システムが全て集約されて残っており、その中で完結性がある。また、その社会システムが子どもたちでも把握できるような範囲に存在しているので、子どもたちが自分たちで課題を発見し解決できるチャンスがたくさんある。

人の課題では、地域に残る選択をする若い世代が少ない中で、外に出る選択肢はあるのに地域に残った、地域愛ある人達をうまく動かすことができれば、すごい力になってくる可能性がある。

情報の課題では、私たち世代ではパソコンを使えない人がほとんどであり、主体性がない限りアクセスできる情報や入ってくる情報は限定される。しかし、その限定された資源や情報の中だからこそ、簡単にネットで調べて終わりではなく、それを活かして生きる力や考える力を身に付けやすいのではないかと。

他には、同市では都会のように最先端や本物に触れる機会がほぼない。しかし、同市だからこそアクセスできる最先端や本物がある。例えば、同市には海底にケーブルを引いて南海トラフ地震をいち早く察知、観測できる体制が整えられている。それに伴い、学者等色々な人が来ており、彼らとのネットワークを作りさえすれば、子どもたちがマンツーマンレベルで知識を授けてもらうことができる。しかし、これらは担い手がいないと何も始まらない。

具体的にどうアクションを起こすかを考え、団体の議論をし、ツーステップでアクションを起こしている。

ステップ1 地域の人や保護者に漂う「ここにおったちゃんちゃあできん」という感情を、「ここも意外といいやか。楽しいやか」という感情に変えることをゴールに、地域の人や町に出てくるための基盤作りをしている。このゴールを達成するために、町の中に出てきてほしい世代に都市部と比較して「やってみたいこと」を実現しやすい環境があることを認識してもらい、高知市に行くよりここがいい、楽しいという経験を積み上げてもらう。その一つの例として、幼児や小中学生を対象にした英語教室を実施している。一番大きかった効果として、子どもたちの保護者と対話する機会が増え、この世代の考えていることやこの世代にも地域愛があることを知ることができた。他には、シャッター街と化した商店街を活用して青空市を開催している。普段地域活動に関心のない層に楽しんでもらえる企画にし、地域への関心を高めて地域参加のきっかけを作る取組である。

ステップ2 主に子どもに向けて、自ら問題を発見して考える力、自分の言葉で表現する力、自発的な行動力を身につけることをゴールとし、二つの活動に取り組んでいる。一つは、中学校でオール地産食材を使用した地産弁当を開発し、原価計算から販売、利益が出たらそれを何に活用するかまで全てやってもらうことを実施した。もう一つは、町内の資源や人的ネットワークを活用して

オープンイノベーションを実施している。議論できる相手を増やしていかない限り、町は衰退していく一方である。自分たちで問題を発見して考え抜く力、自分の言葉でそれを発し、かつ行動もできる人たちを育てていきたいという思いでやっている。

取組事例1 青空市の開催

課題として、「平日休日ともに常に閑散とした町」、「地域活動に参加しない若い世代」があった。これに対し、町民みんなで考えて、「町民の日常にちょっとした楽しみを提供する」、「普段地域活動に関心のない層にも楽しんでもらえる企画にし、地域への関心を高め、地域参加のきっかけをつくる」という目的を設定し、イベントを開催している。外から人を呼ぶという目的は一切入っていない。募集をかけたところ、準備から当日の手伝いまで合わせると、高校生から80代まで総勢40名以上の地域住民が一切の強制なく自発的に実行委員として関わってくれた。実行委員以外に、出店者として参加した地域住民が17店舗分あり、そこも合わせると60名ぐらいが参加していることになる。同町には、顔を白塗りにして即興劇をやる重要無形文化財がある。通常10月の神祭の時だけ披露されるが、子どもたちが自発的にやりたいということで、この場でやる運びになった。

今回SNS発信を多用したが、町を出た多くの若い世代がイベントに合わせて帰省をし、町に残った若い世代と再会して同窓会を開いたという話がたくさん聞こえてきた。他にも、世代を超えて町をどうしていきたいかを議論する機会が創出された。次は何をするか、町の運営はこうやらなくてはいけないのではないか、という議論があちこちで生まれる一つのきっかけになったということである。これを受けて、同市のほかの商店街等から、同じことをやりたいからノウハウを共有してくれという声がたくさん出た。しかし、町民の実行委員会からは「これはこの町だからできたことで、我々がコンセプトを持ってやったからできたこと。だから他の地域でやってもうまくいかない。他の地域でやっても意味がないのではないか。」という意見が出た。この町だからこそできたという誇りも醸成されたのではないだろうか。

取組事例2 中学校でのお弁当プロジェクト

事前に中学校で授業をさせてもらった中で感じた課題として、自ら問題を発見して考える力や自分の言葉で表現する力、自発的に行動する力が無いというのを痛感した。当時は、学んだ基礎知識と体験の紐付けができていない為、学びに対して全く真の興味が持てておらず、発展性が無いという状況があった。また、発言する時はみんなが必ず台本を持っており、それが無いとしゃべれない。常に先生や地域の人たちに受けそうな答えが準備されており、こちらが想定外の質問を投げかけると誰も答えられないという現状があった。自分たちの興味や問題意識に基づかず、先行して義務的に知識が詰め込まれていることが原因である。また、講師の先生にこういうことを聞いたらいいのではないかという提案を、先生が先にしてしまう。そうすると、皆が似たような問いを投げかけ、先生に誘導される結論や回答になる。生徒の興味に関わらず、地域愛や郷土愛を押し付けられること以外に、ジオパークを背負わされるという状況もあった。ジオパーク学習をし、ジオパークとはこういうものだということを綺麗に説明できないといけない。

これに対して具体的な施策として、「生徒たちのやってみたいことを学校と地域が一丸となって全力で叶える」、「結果に紐付いた知識を学ぶという実践型の教育の実施」、「結果が可視化できる教育」、を提案した。それがお弁当プロジェクトである。

もともとの授業では同町の魅力を発信するというテーマで、寄り道したい店や地産食材を使用している宿等をパンフレットを作って発信していた。その過程で、生徒たちがやってみたいと思ったのが、私がやっている民宿で地産食材を用いた夕食メニューを開発したいというものだった。夕食メニューでは、生徒たちは提供をする時にその場にいられないため、お客さんの反応や売上、人気等が見られないまま終わってしまう。であれば、地産弁当メニューを開発して自分たちで売ってはどうかと提案した。原価計算や販売価格、メニューもどこに何を詰めるかも全部生徒たちが考え、こちらはそれを再現して調理をするということでお願いした。生徒たちは地産食材集めや、地域事

業者への販売協力依頼等も全部自分たちでやり、お弁当を作って店頭販売とSNS発信での販売の両方を実施した。

その後に振り返りとして、取組に紐付いた知識の学習をした。一つは売上利益。例えば7,000円の売上利益が出たが人件費を入れたら赤字になる。赤字をカバーするには何をすればいいかを考え、ここで使った食材にはどんな価値があるのか、同市だからこの食材が使えて、この食材がより他の地域よりも価値を持つのは何なのか、というところでジオパークを登場させた。すると生徒たちの目が輝き、そこで初めて腑に落ちた様子だった。次に、得た利益を何に使うかについて考えるため、世の中には消費と浪費と投資という概念があるという話をした。生徒たちからは、ジオパークと結びつけて、開発したお弁当を盛り込んで観光ツアーを企画し、それで地域の外の人に同町を知って楽しんでもらいたい、そうすればもっと稼げるのではないかと新しいやってみてみたいが生まれた。残念ながら、実現には至らずこの話はここで終わりになった。

オープンイノベーション

同市だからこそ可能な人的ネットワークを活用して、防災プロジェクトをやろうとしている。中学生を対象に、新聞記者、地震学者、人文地理学者、社会学者、起業家のメンバーで行う。一つ目の取組として、地震学者の先生から同市のハザードマップが実態を反映できていないと聞き、子どもたちと一緒に津波地震の基礎知識などを得つつ、同市の災害のリスクを考え、リアルなハザードマップを作成しようとしている。もう一つは、同市の魅力マップの作成。ハザードマップの情報も用いて、地震で壊滅的な被害を受けるとされる同町で、被害を受けた後に自分たちはどう生き残るのか、全部無くなったとして同町にどんな町を作りたいのかを考えていく。完全にフリーで、特にこちらから何かを言うこともなく、学者の先生たちに聞きたいことがあれば何でも聞けるような状態で、子どもたちと一緒に学んでいくという形にしている。

最後に結論になるが、AIやロボットといった技術が進歩してきており、これまでのように都会に出て大企業に就職しても決して安泰といえる時代ではなくなっている。今の時代に必要なのは、自分で仕事を生み出していく力ではないかと思っている。

こういった時代の中、地方の小さな地域は、課題を強みや希望に捉え直すことで日本を牽引する存在にもなり得ると考え、学校教育の場で「この町って結構楽しい」と思える若者を育てる。それに加えて、私たち保護者や地域が示していく柱は二つあり、一つは社会で必要とされる学び方の習得の機会をサポートすること、もう一つは個性や特性を伸ばすための機会をサポートすることと考えている。

情報は世の中にたくさんあるが、それが信頼できる知識や情報かを判断して収集し活用する、「アウトプットする力」が必要だと思っている。得られた情報をインプットするだけでは駄目で自分で持っている技能、例えばパワーポイントを使ったりSNSを活用したり何でもいいと思うが、そういった技能や言語を用いてアウトプットする力が重要になってくる。

もう一つは、「自立的に活動できる力」。これは誰かと議論して前に進めていくために、自分の感情をコントロールしたり、目標に向けて計画的に段取っていく力であったり、建設的な主張や交渉ができるという力である。

最後は、「多文化協働できる力」。たくさんの色々な立場の人がいる中で、他者の立場に立って物事を考えることができる、目標達成の為に他者と協働することができる、必ず生じる意見の対立やその原因を突き詰めて解決することができるという力である。

こういった力を育むことを、我々が地域や保護者としてサポートすることで今まで土台を築いてきた学校教育と合わせ、地域起業家精神のようなものが醸成される。さらに、その先、進学をした時に専門性や経験を獲得することで、子どもたちの夢の実現につなげていけるのではないかと考えている。こういうことを妄想しながら個人的には活動している。

こういうものがこの土地で自分が学んできて得られたんだと思えば、必ず夢を実現した時に何か

地域に関わること、地域貢献に関わることをやってくれたり、外で得た専門性や経験を持って町に帰ってくる子どもが増えて、それによって地域も存続していくのではないかと強く考えて行動している。

【意見交換】

(委員)

委員1には、イエナプラン教育を進める中で先生方ともひとつのチームになって進まれていると思うが、先生たちとの関係作りや親御さんとの関係作りで大事にされていること、工夫されていることがあればお聞きしたい。子どもたちはもちろんだが、その周りの大人たちとの関係作りはすごく大切で大変なことが多いのではないかな。

委員2には、学校と公民館、地域のつなぎ役の大切さについて改めて思い、多世代をどうやってつなぎ取り組ませるかという質問をしたい。自分自身も若い世代として地域の中で色々な世代をつなげたいと思い奮闘はしているが、この多世代をつなぐのは非常に難しく、価値感が違う者同士をつなぐのに大事にされてることをお聞きしたい。

委員3には、先ほどの青空市で、世代を超えた80名ぐらいの人たちをつなぎ調整するのは大変ではないかと思い、そこで大事にされていることと、連絡ツールはどうされているのかをお聞きしたい。

(委員1)

イエナプラン教育、対話を通して共に学び共に生きるということだが、園では1か月に1度保護者に来ていただき、イエナプランとはどんなことか、また、保護者が悩んでいることを対話を通して話している。

先生たちは、待つ、導くとあるが、待つというのはすごく大事である。例えば、子どものお迎えで靴紐をなかなかできない子どもがいるが、母親がやってあげて帰る方がいる。そこを昨日より上手になったねと待てる家庭は、そこで子どもが信頼してもらえ、興味関心を親が上手にサポートしてくれている。サポートという言葉が委員3にも委員2にもあったと思うが、サポート、導く、支えるということはすごく大事になってくる。それを保護者と一緒になってやっていき、みんなで共有していく。それが大事になってくるのではないかなと思っている。

(委員2)

先ほど子ども教室のことを紹介したが、まだまだ課題がある。小学校とは機会があるが、中学、高校とは直接接点がなく悩んでいる。ただ今後のいい展望もあり、地元の高校が高台移転を進めている。公民館の近くに移転をするので、何か一緒にやっていきたいという思いもある。

つなぎ方については、すぐにこれだというテクニックはないが、「相手をよく知り、自分をよく知る。」「配慮を欠かさない。」「公民館としても学校への理解を欠かさない。」そういうことは若い人には言っている。

自分は保護者でもあるが、保護者として二歩ぐらい引いた方がいいのかと思っている。何でも丸投げや無関心は駄目だが、その方が学校が萎縮せず仕事がしやすいのではと思う。学校現場は児童が減るから仕事が減るという単純なものではないと思う。公民館、社会教育としても学校教育をサポートしていきたい。学校運営協議会に入ったのもその理由である。

また、子ども教室では月に1回必ず支援員会を設けてとにかく対話をする。会えば解決することもあり、委員も各地色々な場所に行かれてそういう経験がすごくあると思うが、第一印象でこうだろうと思うよりも、会って話をすれば解決することもあるので、そういう機会の大切さはすごく分かる。

(委員 3)

世代間のコミュニケーションはすごく難しい。実行委員が 40 人いる中で、連絡ツールとしてラインのグループを組んでも、既読になっても読んでいない方が多いので、手間だが電話をする。連絡漏れが生じないように、二人体制で連絡をしていくという地道な作業をしている。

理解の部分だが、実行委員 40 人の中でも役割分担ができており、その人が受け持つ役割と全体の大まかな流れは何度も説明するが、全員に 100% の理解は求めている。人によっては 50% 程度の理解や、自分の持ち場のことだけを理解している状態で進めている。また、作業毎にリーダーを決めており、リーダーには確実に全体を統括している者と同じレベルで理解してもらい、そのリーダーが全て確認し大丈夫という状態で最後報告をもらうようにしていた。

(委員 1)

実行委員 40 人は、どんなふうを集めたのか。

(委員 3)

場所を使わせてもらう商店街がある地区の役員の方や、交通誘導をしてくれる交通安全協会支部の方、商工会支部の方以外のメンバーについては、直接声をかけていった。

(委員 1)

大体何年後ぐらいに形になるという構想はあるか。

(委員 3)

5 年後ぐらいに、今の子どもたちが町を使ってやることを、自分たちで発案して動き出すことを想定している。

(委員)

地域の学びの場では異なる意見を持たれる方もおられる。その方に堪えてくださいとも言にくいので、地域の学びの場に多くの人に参画してもらいたい時に、決まったルール等が明示されている方がいいのではないかな。また、地域のあまり関心の無い方を巻き込んでいくための方法がアイデアベースでもあればお伺いしたい。

(委員 1)

イエナプランでは、対話を中心に自分たちで全部決めていく。違う意見があっても、お互いを認め合いながら対話を中心に自分たちで決めていく。だが、相手を傷つけることや相手が嫌な思いをすることは絶対してはいけない。これは子どもたちが本質で分かることであり、あえて校則を作ったり、こうでなければならないというものを作らない。子どもたちがこの時代をどう生きたらいいのかということを自分たちで決めていく。そういう学校にしていきたいと思っている。

(委員 2)

館の事業であるから、委員 3 のように色々な地域の方々が一体になったということは少ないが、心掛けているのは公民館が自分本位になってはいけないということである。色々な会合があるが、夏季大学講座の講師も公民館が決めているのではなく、選定委員会で意見をもらって決めている。選定委員には社会教育委員や市役所職員の他、受講者代表の方もおり、そういう人や場を設定すること。青年団が登場した公民館サークル発表会も代表者を設けていて、日程や内容を決めている。

また、ここは県の社会教育委員会だが、市の社会教育委員会はメンバーが固定化されていたので、こちらから提案させてもらい今回は若い人にも入ってもらった。今までの人が悪いとかではなく、固定化・長期化すると色々な弊害もあり、人が変わると雰囲気も変わってくる。そういう新陳代謝を図っていくということは大事だと思う。

(委員 3)

ルール作りはすごく課題である。今回、実行委員の声かけについて最初は私がしていったが、実行委員が声かけした人たちも受け入れて、私一人の意思によらないように配慮した。

一つだけルールとして設けていたのが、出店をする人は実行委員はできないということ。

実行委員になっても、当日は出店で実行委員としての作業をできないのであれば出店の方に専念してもらうようにした。その方には、意見は賜るし、意見は実行委員会にかけるとするということ形で納得してもらった感じにはなっているが、ずっとこのままではいけないと思っている。

(委員)

理想としてはどんな形か。

(委員 3)

先ほど心にフォーカスするという話があったが、純粹に町をどうにかしたいという思いでやる人と、自分が前を切りたいだけの人がいる。こちら側も心にフォーカスして、できるだけ本当に町をどうにかしたいと真剣に一緒に考えてくれる人たちで固めていきたいと思っており、どこかのタイミングでそういう基準を設けないといけないと思っている。

これはただの青空市ではあるが、経済効果を狙っている訳でもなく商業的な意味でやっている訳ではないので、例えば出店する側も何らかの思いがある人。関係人口の話でいくと、風の人と呼ばれるその町が大好きでリピーターとして通っているような人たち、外の人からの出店であれば、町に何らかの思い入れがある人たちに限定して固めていきたいという思いは持っている。そういう所にフォーカスしている。

(委員)

委員 1 についてだが、子どもたちの豊かな成長発達を阻害している部分を克服するところが見えてきたと思っている。それが学問、芸術すらも画一的な指導からの脱却というところで、愛や慈悲深さが牽引力になってくるというところがすごく学びになった。

委員 2 の提言だが、公民館の効力を最大限に発揮していることが素晴らしいと思う。学校の相談は何でも受け入れているという柔軟性、学校運営協議会に入り込んだり、ふるさと写真展というところの幅の広さだったり、提言として教職員を助けるという考えにすごく頭が下がる。地域活性などは、動かす人たちが豊かではないと活力になっていかない。人口や楽しいことを増やす前に、スタッフ陣営側が豊かにならないとそれが伝播していかないというところは、映画作りと親和性があると思った。

委員 3 は、地域に人が出てこないというところでのどうしたらいいだろうという課題が見えてきた時に、議論できる人員を発掘しないと話にならないという点は、まさに活性化の大義というか大きなところだと思う。不和などもあるが対話してみないと分からない。そういう課題を地域で解決していくことが遠回りのようで一番早いのかなというところで学びになった。

(委員)

委員 3 が最初に出した人口動態は、日本全国にも言えて私も 20 年後どうなんだろうと考える。

よくネットに出てくる広島県安芸高田市の石丸市長がそこを見据えて行政でどうするかと問題提起をしているが、小さい自治体だからこそ教育が大事と言って予算をつけている。

シンガポールは国として小さいが教育にとにかく予算をつぎ込む。委員の報告の中で「投資する」という話があったが、どうしても学校教育だけでは多様性が生み出せない、そういう意味では委員1のように多様性を出すために学校を新設するというのも選択肢として考えられる。

学校の活動では、せっかく子ども主体で、子どもの自律のためにやっていたのに成果を気にするあまり、先生主体の活動にすりかえてしまうというのもある。委員の報告にもあった社会教育の切り口、たとえば、公民館が全て引き受けますという受け皿があると、子どもが地域に主体的に働きかける機会につながり、子どもだけでなく、地域としてもすごく嬉しい。

学校が選ぶことのできる選択肢をどう広げられるか。行政が学校と地域の資源をどうつなげていくのか考えられたら、これから議論が広がるのかなという感想を持った。

(委員)

今日それぞれの話を聞きこれから社会教育主事は大変だと思った。これからの社会を生き抜いていく子どもたち、地域・住民を作るためには、サポーターとしての社会教育主事の力は非常に大きい。

学校教育は学校教育でこれまでの教育ではなくて何をやるのか、最終的な目標を見据えてそこからおりてきて教育をしていく。その中で自立して物事を考え判断して作っていくという教育にしていく。それをサポートしてくれるのが公民館や社会教育的グループで、最終的には地域学校協働本部事業やコミュニティ・スクール。これが真剣の場である。各市町村がこれから生きていくために、これからふるさとを大切にしていけるためにどうするのかというコミュニティ。これを社会教育がどう磨いていくのか。すごい提言だと思った。

地域学校協働本部事業にしても、ありきたり、今までどおりではなくて、何をその市町村でポイントとしてやっていくのか。それをサポートしていくのも社会教育主事の仕事である。提言をたくさんいただいて、教育の幅の広さ、今後のグローバルな教育を見据えて学校と互いに連携していくことも大事。だからどうしていくのかというのを感じた。

(委員)

まずは、社会で生きていく一人の人間が、自分の意思や考えを持って生きていくことが大事である。学校教育でも社会教育でも、そういったものを醸成する機会があればよいと思う。

また、社会教育で実践される社会、地域において、委員3の話にもあったが、子どもたちが生き生きと生きられるようになれば、町に全然誇りがなく何も無いと言っていた大人たちも、それを見て感化されるのではないかと改めて思う。

【その他】

次回は、8月に行う。

3 閉会 (11:55～12:00)